

表象と文化的アイデンティティ

粟谷 佳司

AWATANI Yoshiji

はじめに

グローバル化しボーダレス化する現代世界の現状は、それまで自明のものとされてきたモダニティという編成を揺るがす様相を呈している。このような状況を部分的に予見していたのがポストモダンの社会理論である。「ポストモダン」というタームが広く知られるようになったのは、周知のように、ジャン・フランソワ・リオタールの『ポストモダンの条件』(1979)が嚆矢であるといわれているが、それが現在ではモダニティの変容と平行してグローバル化の議論に引き継がれている(Hall et al eds 1992, Giddens 1990, Tomlinson 1999など)。そして、このような状況においては、グローバル、ローカルなどのさまざまなレベルにおいて、それまである圏の内部にあるものとして語られてきた文化とアイデンティティが再び争点になっている(Morley and Robins 1995)。

本稿が取り上げる課題は、このような状況の中で多様なものへ向けた文化的なアイデンティティについてである。それを「表象 representation」に関わる問題として取り上げる。なぜなら、文化的アイデンティティは「表象の政治学」といわれるものと密接に関係していて、それがどのように表象されるのかということが問題だからである。それをポストモダンの社会理論と対比させながら考察する。「表象」は構造主義以降のポストモダン思想のなかで先鋭化されてきた概念であり、そこで一面的に取り扱われているものとの差異を明確にするのは有意義であると思われる。また、ここ

で考察する文化的アイデンティティは、エドワード・サイードやステュアート・ホールらが批判したような西洋的な「主体」として「表象」されてきたものに対する批判が含まれている(Said 1979, Hall 1990/1994)。それを「差異 difference」の観点から考察したい。

1 ポストモダン理論と表象

デヴィッド・ハーヴェイがリオタールをおそらく意識してであろう『ポストモダニティの条件』(Harvey 1988)というタイトルの著書を書いたように、現代の文化やメディアの研究において議論の一つになっているのが「ポストモダン」状況をどのように評価するのかということだろう。ポストモダニズムの社会理論は、英米圏ではジャン・ボードリヤールの理論の影響が大きい。もともとボードリヤールは80年代に優位だった消費社会論の理論家として知られていた。

「ポストモダニズム」という言葉は、現代のメディアや文化についての研究(さらには人文社会科学の諸領域)において広く行き渡っているものである。80年代に日本でも優位だった消費社会論は、良くも悪くもその代表格であるボードリヤールの社会理論を中心にしながら展開されていた。しかし現在の英米圏では、あたかも消費社会論が「ポストモダニズム」に置き換えられてしまったかのような印象を受ける。ボードリヤールはたとえ本人が否定しようと「ポストモダニズム」の理論家であるように受容されているのである(Gane 1990, Kellner 1990, 1995, Featherstone 1991、

1995、Poster 1991 など)。

しかしながら、「ポストモダニズム」は定義の曖昧さも伴ってさまざまな反応を引き起こしている。例えば、「ポストモダニズム」を語源的に分析したマイク・フェザーストーンは「モダニズム」との対比からそれを4種類に分類し (Feartherstone 1991)、時代の変化というより資本主義の新たな段階と位置づけている (Feartherstone 1995)。また、デヴィッド・ライアンは、アンソニー・ギデンズやジグムント・バウマンなどにならって「ポストモダニズム」と「ポストモダニティ」に分けながら、前者を主に文化や芸術を扱うときに使用し、後者には社会状況を分析するためにあてられている (Lyon 1994=1996)。

このような現代文化研究における「ポストモダン」状況を、本稿の関心からとりあえずはメディアや文化に現れる「意味」や「内容」がその指示対象から自律した「シニフィアン」の過剰や、あるいはその連鎖のなかに消失してしまった状態としてまとめることができる。つまり、それは「意味の戯れ」や「ポストモダニズム」が内包する「メタ物語」の終焉 (Lyotard 1979=1986) に関わるものであり、ここで重要になるのが「言語」あるいは「記号」である。

もともとロラン・バルトのような記号論の基本的な考え方によれば、記号を「シニフィアン (記号表現、意味するもの)」と「シニフィエ (記号内容、意味されるもの)」とに分け、それらが意味を産出する際に両者のずれや、時には「シニフィアン」が過剰になることが考察の対象にされていた。バルトにとってはまだ、ソシュールから引き継がれた「シニフィアン」、「シニフィエ」はコインの両面のように分かち難く結びついているということが含意されていた。

しかし、ボードリヤールは「意味」とはそれ自身が「内破 implosion」¹⁾したものであるという観

点に立つ。そして、「シニフィアン」と「シニフィエ」は分離され、記号が不安定なかたちで戯れるという。

「浮遊する」シニフィアン」の固有の論理が生まれる。「浮遊する」シニフィアンというのは、それがまだシニフィエを見いだしてはいないが、いつかシニフィエを見いだすだろうといったレヴィ＝ストロースの意味でのシニフィアンではなくて、シニフィアンの繁殖と無際限の戯れへの制限となるあらゆるシニフィエ (現実のなかにある等価物) から解放されているという意味でのシニフィアンである。」 (Baudriard 1975=1982. 48)²⁾

そして、ここから「物」が「シミュラークル」へと変容していくまでは、あと一歩だったわけである。最終的には、ボードリヤールは、バルトとは異なり、ソシュールの「アナグラム」を引用しながら、記号が内包してしまう別の意味の可能性に目を向けるのである。

このような「意味」の「内破」について、ボードリヤールは、ルネッサンスから産業社会、ポスト産業社会にいたる歴史の中で「物」のもつ「オリジナル」性が崩壊していく様から考察している (ibid)。そもそもボードリヤールにとっては、指示対象が「本質」にどこまでいってもたどり着かないオリジナルなき「シミュラークル」が重要であったために、「物」はルネッサンス期、産業社会を通して「模造」や「生産」による「シミュラークル」につねに脅かされていたのである (Baudriard 1981=1984)³⁾。しかし現代社会はそれがさらに進んだものであるという。

「現代は第三の領域の時代である。実在の領域はもはや存在せず、存在するのはハイパー現実の領域である。」 (Baudriard 1975=1982. 10)

ここでは、「生産・意味作用・情動・実体・歴史」といったもろもろの座標軸は終焉し (ibid : 19) 「シミュラークル」の支配する「オリジナル」

なき「ハイパーリアル」の世界が展開されることになる。

「こうして現実^{リアリティ}は、ハイパー・リアリズム、すなわち現実そのものを緻密なコピーにしてしまう過程で崩壊するのだが、この過程は、とりわけ宣伝や写真などの複製的メディアによってはじめられる。」(ibid: 150)

このようなボードリヤールの理論は、消費社会論以降のテレビの内容分析にも広く利用されているものである。80年代から日本でも放送が始まったMTV(ミュージック・テレビジョン)の分析はポストモダンの理論による解釈が優勢であった。アンドリュー・グッドウィンによれば、「ポストモダニズム」におけるこのような意味が指示対象から自律しているというテレビの内容分析は、フレデリック・ジェイムソンのいう消費社会の文化の考察にも影響を受けながら、テレビの内容はその「意味」が「パステーション」にとってかわられるという(Goodwin 1992)。ここでいう「パステーション」とは「パロディ」のようにスタイルを模倣するものとして位置づけられるが、「パロディ」との違いは指示対象への批判的な言及が含まれない「意味の死」として捉えられるというところにある(Jameson 1990, 1998)。ジェイムソンが言及しているトーキング・ヘッズやギャング・オブ・フォーの音楽、あるいはMTVはまさに「内容」と「意味」が分離した「シニフィアンの戯れ」として表現されているのである(Goodwin 1993, 45 ff)⁴⁾。

しかし、ここで賭けられている「ポストモダン」における「意味の戯れ」には「表象」の働きの一面のみが扱われているに過ぎない。なぜなら、ボードリヤールのような「意味」が「内破」した「シミュラークル」であるとするならば、「表象」が構築される際の「折衝 negotiation」の可能性が閉ざされてしまっているのである。

つまり、「シニフィアンの戯れ」という問題構成では、構造主義以降のシステムとして仮定された、閉じられたものの内部の共時的な分析には有効であっても、そのようなシステムの外部から持ち込まれるハイブリディティというグローバル化が含みこむ現象には対応できないし、またシニフィアンが接合することによるアイデンティティの「結節点」はいつまでたっても保留されたままなのである⁵⁾。

2 表象のロジック

「表象」の問題は前節で考察したようなポストモダンの社会理論における「意味の戯れ」だけに留まらない。「表象」が「意味」を作り出すメカニズムの問題が残されている。まずは「表象」を記号論との関係から考察しよう。

記号論の始祖といわれるソシュール以前の言語の考え方では、言語は物事の本質を誤りなく示し、真理を表象するものというものであった。それが、ソシュールによって劇的な転回(言語論的転回)を遂げることになる。つまり、ソシュールによって言語が物事の真理を透明なかたちで表象しているのではなく、それは他の言語との関係において否定的にしか表象されないとされたのである。例えば、「赤」という言語は「赤」の本質や真理を表象しているのではなく、「黒」でもなく「黄色」でもなく、というような示差的な関係の上でしか定義できないということである⁶⁾。

これが「表象」の領域に導入されるとどのようになるか。ここで「表象」として現れるリアリティは、その「内容」が生産される際にどのようにして物事 things が定義されるのかということになる。これは、例えば、テレビなどのメディアが現実を曇りなく写しているとする、反映的 reflexive な役割を疑問に付すものである。そして、そのような偽りの自然主義 assumed naturalism に支

えられた言語の透明な概念が問題にされるようになった (Hall 1982. 64)。つまり、リアリティは「現実」の選択された定義が表象されることによって、言語的实践を通して支えられ、生産されるものとして現れることになる。

ここでいう表象の概念は、反映の概念とは著しく異なっている。ジョン・フィスクによると、表象を中心とする理論は、所与の現実を鏡のように反映するものではなく、そのような現実解釈によって構築されたものとする見方であるという (Fiske 1991=1995. 79)。もともと、記号というものが対象を表象するもの (stand for, represent) として定義して、それを解釈されることによって「意味」が作り出されると考えたのは、ソシュールと同じように「記号学 semiotic」を構想していた、アメリカのプラグマティズムの哲学者、チャールズ・サンダース・パースであった。

従って、表象という概念が含意するものは、既に意味がもとから存在していてその意味を単に伝達し、反映するというのではなく、むしろ、物事というものはその意味を作り出す実践、生産であるということである。「表象」はボードリヤールのいうような「シニフィアン」の戯れ」だけではない「構築」の側面を重視する必要がある。そうになると、リアリティは、もはや単なる所与の事実の集合 a given set of facts として見られることが出来なくなる。従って、メディアにおいては「リアリティ」を単に再生産するのではなく、積極的に定義する方向に働くことになるのである。

ステュアート・ホールは、メディアにおけるメッセージの意味構成の過程において、交換、使用価値は、メッセージが内包する象徴的価値に依存しているという。従って、メディアとは、社会実践が「表象」という象徴的生産物を生産するように組織化された制度であると定義される (Hall ibid)。

結果として、このようにメディアが行うメッセージ生産の過程は「意味作用の実践 signifying practice」として現れることになる。つまり、メディアは意味作用のエージェントになる。従ってメッセージは、今や、「メッセージ」の単なる言明 statement というより、「表象」の意味作用をめぐる「折衝」の観点から分析されなければならない。そして、焦点はこのことをめぐって行われる「意味作用の政治学 the politics of signification」に移るのである (Hall 1982. 69)。

ところで、このような「意味作用の政治学」においては、メディアのメッセージによってアイデンティティがどのように「表象」されるのかという問題が浮かび上がってくる。つまり、「表象」の意味作用をめぐるどのようにそれが「主体」として構成されるのかという問題のことである。文化的アイデンティティと「差異」を考えるとときに、この論点を明確にしておく必要があるだろう。そこで取り上げられるのが、現在の思想状況においてもアクチュアルに語られるフランスの構造主義以降の思想に影響を受けたメディア研究である⁷⁾。

3 表象と主体の問題—「イデオロギー装置」論におけるアルチュセールとラカン

既に様々なところで言及されているように、メディアにおいて「表象」をめぐる「主体」の問題は、ルイ・アルチュセールの「国家のイデオロギー装置」論を援用した、映画雑誌『スクリーン』に集う研究者によって盛んに議論されていた⁸⁾。

映画教育者のための雑誌『スクリーン』は、フランスの(ポスト)構造主義理論(特にラカン派の精神分析)を、1970年代のイギリスで最初に紹介したものの中の一つだった。『スクリーン』については、当時の『ニュー・レフト・レビュー

ー』と同じように、イギリスの知識人にとって野心的な雑誌であったというような指摘もなされている (Davies 1995. 89 ff)。

ところで、ここでいわれるスクリーン理論とはステーブン・ヒースやコリン・マッケイブが特徴的であり、彼らは精神分析学のジャック・ラカンやその後継者であるジャック・アラン・ミレールなどのラカン派、そしてラカンからの影響が認められるアルチュセールやアルチュセール派の言語学者、ミシェル・ペシュエなどの信奉者であった⁹⁾。

「彼らは映画の表象の形式的構造に関心を持っていた。それは観客によって見られ知られる一定の方法が、どのようにしてそれらの表象によって構成されていくのか、ということの問題にすることだった。」 (Moore 1993. 12)。

彼らは『スクリーン』誌上で映画や文化理論について革新的な仕事をした。そして、そこで理論的支柱になっていたのが、ラカンの「主体構成」についての議論と、アルチュセールの「国家のイデオロギー装置」におけるイデオロギーによる「呼びかけ interpellation」の議論であった。

ラカンの「鏡像段階」の説明を引いてみよう (Lacan 1966=1972)。これは主体が言語の媒介によって他者との同一視の弁証法に乗り出す前に「自我」、「私」を構造化する過程についての理論である。

生後6カ月ぐらいの「まだ、口のきけない状態にある小さな子ども」は、鏡に映る自分の身体の像 image を自分のものとして引き受けることが出来るようになる。この時期の幼児はメラニー・クラインのいうように、自己の身体を分断されたものとして「分断された身体」として生きている。ここには、人間の幼児は未成熟のまま世界に生まれ落ちるという前提があり、このような幼児は環境にうまく適応することが出来ずに身体的に

自分が分裂し、解体しているというイメージを持っているのである。そこで幼児は「鏡像段階」によって鏡の自己と同一化を図り、自己の同一性を先取る形になる。

「鏡像段階」は、次のような三つの段階を経るとされる (Dor. 1985=1989)。

まず、第一段階として、子どもは鏡像を実在するものと知覚し、つかもうとしたり、近寄ろうとする。子どもは嬉々としながらこの像に反応するが、鏡のなかのこの姿、すなわち彼自身の像を他者の像として認知しているようである。

そして第二段階では、子どもは、鏡のなかの他者は像に過ぎず実在ではないことを悟っていく。

最後の第三段階には、子どもは他者を像として知っているだけではなくて、その他者を自分の像として確信を得るということである。

このような存在 Sein と仮象 Schein の弁証法を通じて、幼児は鏡像としての自己を自分の内面における「私」として想像的に同一化していくことによって「自我」の機能を構成していくのである。ここでは光学的像（表象）である鏡像の「想像的な再認」が行われていることが重要である。この光学的像がすなわちスクリーンだからである。

そして、この過程は、何も幼児期だけのものではなく、その人の生涯にわたって「他者」との関係のなかで続くものであるとされる。

「鏡像段階、それが単に発達の一時期ではないことは何度も強調しました。それは範例的な機能も持っています。なぜならそれは自我の「Urbild (原像)」としての自身の像に対する主体の幾つかの関係を露わにしてくれるからです。」 (Lacan 1975=1991. 121)

ここで注意しなければならないのは、ラカンの言う「自我」は、それ自体としては存在しないということである。なぜなら、このように形成され

る「私」、「自我」は、鏡像の原理によりイメージとして形成されるということ、それは徹底的に想像的なものであるということ、そして、自我は自己をまず他者として認識するということである。そして、ここでは、自我は、自らを知るために本質的につきまとう慢性的な「誤認の機能」に特徴づけられるということである。

この過程をラカンのいう「Schema L」に沿って見てみよう（図1、2）。

ここでは主体（S）は、「その言いようもない、茫然自失とした存在である」といわれている。それは原初に在ったと想定される限りでの主体である。そしてその自我である「a」は、その欲望の対象である a' すなわち「小文字の他者 l'autre」と「想像的關係」を結んでいる。これが「鏡像段階」であり、この関係のなかで自我は存在しているのである。やがて、自我は言語の支配する「象徴界」に入ることによって、そこに属する「絶対的審級」である「大文字の他者 l'Autre」である「A」との関係のなかに入っていくことになる（Lacan 1966. 549. 訳、312）。

そして、このような主体形成の「誤認の機能」がアルチュセールの論文「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」（Althusser 1970/1996）のなかのイデオロギーによる「呼びかけ」の機制に結び付けられる。それを、アルチュセールのイデオロギー論とラカンとの関係から見ていこう。

アルチュセールは「イデオロギー装置」によるイデオロギーの働きについていくつかのテーゼを提示している。

「イデオロギーは諸個人が彼らの存在の現実的諸条件に対してもつ想像上の関係の《表象》である。」（ibid: 296. 訳、66）

このテーゼは、従来までのイデオロギーが、現実の人間の存在諸条件を歪めて反映するもの、いわゆる「虚偽意識」とする考えに変更を迫るもの

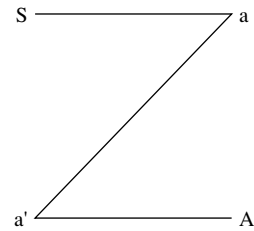


図1

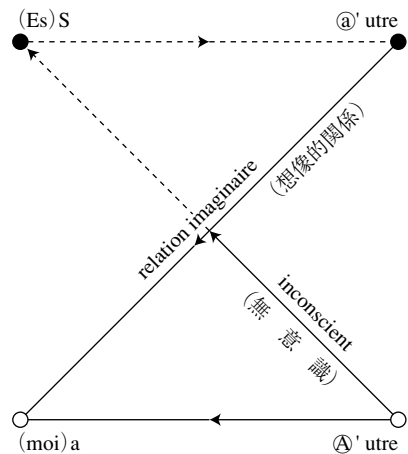


図2

である。なぜなら、アルチュセールが批判するように、「虚偽意識」という考え方は、「人間の存在の現実的諸条件の想像のうえでの倒錯や変形に対する、すなわち人間の存在的諸条件の表象についての想像の中での疎外に対する、ひとつの原因を探究し発見するもの」（ibid: 297. 訳、69）であるからだ。そして、その原因として発見されるのが、「イデオロギーのなかで人が見出す世界の想像的表象に反映されているもの、それは人間の存在諸条件であり、人間の世界である。」（ibid: 297. 訳、69）

しかし、人間の存在的諸条件は、アルチュセールによれば最終審級において生産諸関係や生産諸関係から派生する諸関係に依存しているので、そ

れを「原因」とすることが出来ないのである。従って、アルチュセールは、人間の存在諸条件が「原因」となるのではなく、それらはイデオロギーとの「関係 rapport」のなかで存在するという考えを提起する。

「イデオロギーのなかで《人間》が《思い描く》のは、人間の現実の存在諸条件や彼らの現実の世界ではなく、何よりも人間にとってイデオロギーのなかで表象されるのは、こうした存在諸条件に対する人間の関係なのである。…現実の世界のイデオロギー的表象の想像上の変形を説明すべき《原因》を支えているのは、こうした関係においてである。…つまり、（人はイデオロギーのもつ真理のなかでは生きてはいないとしても）あらゆるイデオロギーのなかで観察しうる想像上の変形を支えているのは、こうした関係の想像的性質である。」(ibid: 297-298. 訳、67)

つまり、アルチュセールはイデオロギーを、男と女の想像的關係、存在の現実条件との関係のなかで「生きている」というような概念、表象として定義しているのである。「イデオロギー」はここでは、観念の内容や表面的な形式としてではなく、表象され、生きられた状況の無意識のカテゴリーとして概念化されている。

「イデオロギーは一つの表象体系ではあるけれども、これらの表象は多くの場合、「意識」とは関係がない。…それ [表象] は何よりもまず構造として、大多数の人々に認められ、彼らの「意識」を通らないのである。…人間が世界との「生きられた」関係を変化させ、「意識」といわれる、この種差的な無意識の新しい形態を獲得することに成功するのは、こうしたイデオロギー上の無意識の内部においてなのである。」(Althusser 1965/1996、239-240 訳、413-415)

ここでは、まず現実があって、それがイデオロギーによって歪められているということではな

く、そもそも現実とはイデオロギーの「効果」によって析出されるものであり、そこでは諸個人と社会の「想像的な関係」が表象するもののうえにすべてが成り立っているということ前提とされなければならないということである。アルチュセールは説明の順序を逆にして、「初めにイデオロギーありき」と考えている。そしてこのような「関係」を支えているのが「最終審級において、生産諸関係や生産諸関係から派生する諸関係」すなわち経済の決定である。

「すなわち、想像上の必然的なイデオロギーの変形の中で、あらゆるイデオロギーが表象するのは、現存する生産諸関係（およびそこから派生する別の諸関係）ではなく、何よりも生産諸関係、およびそこから派生する諸関係に対する諸個人の（想像上の）関係である。従って、イデオロギーの中では、諸個人の存在を統制する現実の諸関係のシステムが表象されているのではなく、諸個人と、彼らがそのもとで生きる現実的諸関係との想像上の関係が表象されているのである。」(Althusser 1970/1996、298. 訳、70-71)

そして、このような生産諸関係からイデオロギーが表象されるとするのなら、それは「観念」としては表象されず、物質的な存在をもつということになる。これが、アルチュセールがイデオロギーの第二のテーゼとして提出したものである。このようなイデオロギーは、「国家のイデオロギー装置」と呼ばれるものによって実現される。ここから、どうして諸個人に与えられた表象が必然的に想像的にならざるを得ないのかという置き換えられた問いに答えられるようになる。それは「イデオロギー装置」の効果なのである。

イデオロギーは、このような「装置」を通して、私たちの「実践的行為」にまで貫徹しているとされる。

「問題となっている個人は、あれこれのやり方

で振る舞い、あれこれの実践的行為を選び、そして、さらに加えて、一定の規則化された実践的行為に関わる。こうした行為は、個人が全く意識的に、主体として自由に選んだ諸観念が《依存》しているイデオロギー装置のものなのである」(ibid: 300. 訳、75)

ところで、このイデオロギーのテーゼとラカンの関係はどのようなものか。

ここでは、アルチュセールの言うイデオロギーと諸個人の関係と、ラカンのいう「Schema L」のなかで「自我」と「小文字の他者」との想像的關係を容易に見て取れるだろう。すなわち、諸個人はイデオロギーを通して社会と想像的な関係を結んでいるということである。これは個人の意識のなかにまで及んでいるということである。

そして、アルチュセールはイデオロギーの「呼びかけ」の機制に言及する。

「イデオロギーは主体としての諸個人に呼びかける。」(ibid: 302. 訳、81)

アルチュセールはこのテーゼに対して、主体のカタゴリーを機能与件とするイデオロギーの構成について述べている。

「我々が言いたいのは、イデオロギーは具体的主体を対象としてしか存在しないし、こうしたイデオロギーの使命は、主体によってしか可能とならない。つまり、主体のカタゴリーとその機能によってしか可能にならないということだ。」(ibid: 302. 訳、81)

ここでいわれていることは、イデオロギーが存在するには呼びかけによって「主体」を要請しなければならないということである。ではこのような「主体」という概念はどのようなものか。

「我々は、主体というカタゴリーはあらゆるイデオロギーにとって構成的であると主張する。しかし、同時かつただちに、我々はあらゆるイデオロギーが具体的諸個人を主体として《構成する》

ことを機能（この機能がイデオロギーを決定している）としてもつ限りにおいてのみ、主体のカタゴリーはあらゆるイデオロギーにとって機能的なのだ、ということをつけ加えておく。」(ibid: 303. 訳、82)

イデオロギーは具体的諸個人を主体として、呼びかけ、構成することによって、その主体をイデオロギーの機能与件とするわけである。諸個人は「国家のイデオロギー装置」に主体として呼びかけられるやいなや、イデオロギーの再生産の循環のなかに組み込まれる。なぜなら、生産諸条件を整えるためには、国家の抑圧装置による暴力の抑圧だけではなくイデオロギーによって支配を再生産する必要があるためであった。

ところで、ラカンのいう「象徴界」とここに挙げたイデオロギーのテーゼとの関係は一見わかりにくい。ラカンはそこでいわれている「呼びかけ」については言及していないのである¹⁰⁾。

しかし、今村仁司によれば、「そこにアルチュセールの工夫があった」という。すなわち、「イデオロギー（「文化の法」）は、具体的・現実的個人に、大声で、あるいはひそかに、「よびかけて」、個人とは区別される「主体」（シュジェ）へと作りかえる。作りかえられた主体は、まさにそのことで「文化の法」たる象徴秩序に従うことになる。」(今村 1981. 128)

個人が主体として構成されるときには、常にイデオロギーの機能が働いている。そして、主体化の機能には「呼びかけ」が重要になってくるのである。

「(1)主体としての《諸個人》への呼びかけ。

(2)諸個人の大字の主体 *Sujet* への服従。

(3)諸主体と大字の主体のあいだの、そして諸主体のあいだでの相互の再認と、結局は主体自身による、主体の再認。

(4)こうしてすべては首尾は上々で、諸主体が自

分たちが何者であるかを再認し、それに応じて行動しさえすれば、将来も首尾は上々であろう、《かくあれかし [アーメン] !》となるための絶対的保証。」(Althusser 1970/1996. 310. 訳、99)

ここでいわれる呼びかけのプロセスとして、アルチュセールは警官の職務質問を挙げている。それは、例えば、《おい、お前、そこのお前のことだ!》という毎日耳にする警官(やその他の)呼びかけに端的に現れているという。そのように呼びかけられることによって、呼びかけられた諸個人はそれが自分であることを知り、主体として大文字の主体に服従する。そのような呼びかけは、毎日至るところで行われているのである。

このように、ラカンのいう想像的關係から「象徴界」への主体化のプロセスは、形を変えてアルチュセールのイデオロギーの呼びかけによる主体化のプロセスへと取り込まれているのであった。

4 メディア・コミュニケーション研究における主体構成の問題

このようなイデオロギーによる主体化のプロセスについて、メディア・コミュニケーション研究において重要なのがアルチュセールの「イデオロギー装置」と「呼びかけ」の機制であろう。つまり、テレビや映画のスクリーンは物質的なイデオロギーの「装置」として存在し、そのような「装置」からイデオロギーによって「呼びかけ」られることによって、観客は「主体」になるということである。ヒースの言い方では「主体」として「縫い付け suture」¹¹⁾ (Hearth 1981. 76-112) されるということである。

「観客は、その縫い付けによって、象徴界と想像界が結びつく映像の諸関係の主体として作り直される。」(Hearth. *ibid.*: 108)

ここでも呼びかけられることによって、呼びかけられた観客はそれが自分であることを知り、主

体としてラカンのいう大文字の主体に服従するというプロセスが繰り返されている。

ここまでの要点をまとめておこう。イデオロギーは、抽象的存在である個人を「国家のイデオロギー装置」である大文字の主体(象徴界)の「呼びかけ」によって支配的イデオロギーのもとで主体にして従属させる。そこでは、象徴的な再認において、常に現実の生産関係の想像的な誤認が伴われるのである。イデオロギーは常に既に諸個人を主体として呼びかけなければならない。そして、このような「呼びかけ」は、ある時期から諸個人を主体として呼びかけるのではなくて、その誕生の瞬間から既に行われている儀式なのである。そうでなければ、社会編制は一年たりとも生きながらえることができないからである。

「こうしたメカニズムのなかで問題となっている現実、すなわち再認の諸形態(イデオロギー＝再認/誤認)それ自体において必然的に誤認される現実とは、結果的に、最終的にはまさに生産諸関係と、そこから派生する諸関係の再生産なのである。」(Althusser 1970/1996. 311-312. 訳、102)

これは、先に挙げた「鏡像段階説」における幼児の「誤認の機能」による主体化のプロセスを、社会の再生産過程にまで上げた、といえるものである。もちろん、この「主体」は先ほどのラカンのところで見たような、「誤認の機能」によって構成される。そして、スクリーン理論においては、このようなラカンやアルチュセールなどの「主体」の理論によりながら映画のイデオロギー的機能が問題にされたのであった¹²⁾。

「その狙いは、主体のポジションの生産を通じてフィルムの中の観客を縫いつけながら、彼らの上に映画のテキストが主体性を授ける象徴的メカニズムを暴露することだった。」(Moore *ibid.*: 13)

ところでホールは、言語とイデオロギーに関す

る論文の中で、これまでの映画研究と記号論との関連に触れながら、ラカンやアルチュセール、スクリーン理論に言及している。そして、とりあえずは彼らに敬意を表しながら次のように述べている (Hall 1980. 158-159)。

「スクリーン理論は、主体という無視された領域を開拓することで、言語、表象、イデオロギーの現行理論を補完するための試み以上のものであるといわねばならない。事実上、すべての先行する理論は、ラカンの説を引用することで実質的に再構成されるか、とって代わられてしまった。」

あるいは、「スクリーン理論は、まったくもって非常に野心的な理論的構成物である。というのも、生物学的個体がいかに社会的主体となるのか、またそれらの主体はいかにして特定のイデオロギー的言説に呼びかけられるのか、という問いに説明を与えようとしているからである。」

しかし、ホールやデヴィット・モーレイは、スクリーン理論が映画というテキスト(表象)に決定的なイデオロギーの再生産の機能を与えていると批判している。ここでの問題は、ヒースの描くような表象による主体構成は余りにもスタティックなものであり、ズレを孕んだ「差異」を介入させるその他のテキストや言説の介入を無視しているというのである (Morley 1980. 163)。モーレイはさらに、スクリーン理論のいう主体(つまり視聴者)はここでは、映画という単一の言説構造に縛りつけられた無意識に規定された人形のようなものである、とつけ加える (ibid: 167)¹³⁾。

スクリーン理論、そしてアルチュセールの問題を要約すれば以下のようになるだろう (Hall 1980. 159-161)。

・この理論は、一連のホモロジー、例えば、「イデオロギーは言語のように構造化されている」や、ラカンの有名なテーゼ、「無意識は言語のよ

うに構造化されている」を確立することによって実証される。これらは各々が「のように」ではなく「同じもの」として宣言されているのである。同じ無意識のメカニズムによる同じ契機から成っている。相同性 homology から同一性 identity へのこのような動きは、うさんくさい手順である。そしてこれまでのところ適切に防御されていない。

・ソシユールの言語学において「主体」が全面的に除外した実践によって説明されたことは、現在では、単純な転倒によって、「主体」のレベルでもっぱら説明されている。

・ラカンや「スクリーン理論」がやっていることは、私たちは「主体」の機能を考慮に入れないならば言語/イデオロギーの理論を適切に扱えないということ。しかしそれらは、どのようにして言語一般 language in general によって既に「位置づけされた」歴史的に特殊な主体が、ある社会編制 social formations において個別の言説や歴史的に特殊なイデオロギーに関して機能しているのかを説明しない。ラカンやスクリーン理論の考え方は、異なる時期のさまざまな社会編制での差異を説明することが出来ない。

・これではイデオロギーにおける「闘争」の概念を構築することが出来ない。

つまり、ここでいわれていることは、アルチュセールやその「呼びかけ」を応用したヒースの考え方では、受動的に構成される「主体」のみを重視して、さまざまなテキストが絡み合う社会的諸関係の契機が無視されたままであるということである。従って、ホールやモーレイは、スクリーン理論のテキスト決定論やアルチュセールの機能主義的社会理論を退けた。そして、有名な「エンコーディング/デコーディング」モデルによって言説が孕むズレに注目しながら「多様なもの」のな

かからアイデンティティを考察することに方向を転換させる視座を与えたのである。そして、これは、次に見るように「折衝」のプロセスの問題をクローズアップさせるのである。

5 文化的アイデンティティと多様なものへの政治学

文化的アイデンティティの問題には常に表象が関わっている。これは、「表象」と「差異」、いかえれば「表象それ自体の政治学」と「差異の概念を再理論化すること」(Morley and Chen 1996. 8)に関する問題として取り上げられたものである。「表象それ自体の政治学」の問題圏に視線を向けてみれば「差異の概念を再理論化すること」、あるいは多様なものへの政治学とも呼べるものへの道を開くだろう。

アメリカ合衆国や大英帝国のようなマルチカルチュラルな社会においては、それまでの「アイデンティティ・ポリティクス」という名において幾度も繰り返されてきた言説では、例えば「ブラック」という「表象」によって黒人として表象される人々に対しては、露骨なステレオタイプに無垢で肯定的なイメージが与えられてきていた (Hall 1988/1996, West 1996)。歴史的に合衆国における黒人解放運動による権利要求の運動は、一定の成果があげられてきたのはもちろんのことではあるが、しかし、このように本来多様であるはずのものが「ブラック」というひとつの本質であるかのように構築されることにより逆説をも生み出しているのである。

例えば、行政の問題としては、対立するゲッター化が進むことによって、メディアにおいて「犯罪の増加」と「黒人の移民」の数の増加を関連づけるというようなニュース報道のレトリックにもそれは現れる (Hall 1982)。つまり、「ブラック」という乱暴なカテゴリーを構築することは、却つ

て「敵」として「取り締まり policing」(Hall et al. 1979)の対象になり、あるいは管理することを容易にしているものである (酒井 2001)¹⁴。そして、結局ここからある種の原理主義的な言説が生まれたことは歴史の示すところである。従って、そのような原理的に動員される民族運動とは異なる「表象それ自体の政治学」が提起されなければならないのである。

これは、最近のポストコロニアル批評、特にエドワード・サイードの有名な議論、すなわち西洋(オクシデント)が「オリエント」という概念をどのように創出し表象していったのかという議論と呼応する (Said 1978=1993)。つまり、西洋は自らを表すために、オリエントの表象を必要としたわけである。実は西洋と東洋とは相互に補完する関係のなかにあったのが、それがいつのまにか支配/被支配の構造を作り上げる、そのメカニズムが考察の対象とされなければならない。ここでは、構造主義者が好んで利用する「支配者/被支配者」、「男/女」というような二項の関係の差異という思考法ではなく、不断の「折衝」による実践においてその境界線は偶発的なものにさらされ、常に引き直されているということである。

ホールは「サードシネマ」と呼ばれる映画を考察することによって、このような表象それ自体を問題にする政治学を「本質的な黒人主体の終焉」というところに見出している (Hall 1988/1996)。これは歴史的に見てみれば、「ブラック」というカテゴリー(やアイデンティティ)はもともと白人によって構成され表象されてきたものということに由来している。「ブラック」や「ホワイト」という区別は合衆国の言説においては「カラーライン」ともいわれるものであるが、ホールは自分の知的遍歴を語る中で、そのような「カラー」の問題に疑義を差し挟むのである (Hall 1996=1996)。つまり、彼はカリブ海世界出身のディア

スポラな歴史を背景にして兄弟のなかで自分ももっとも肌が黒く生まれてきたという経験があり、それを暴力的に「ブラック」として表象されることは脱構築されなければならない事柄であったのである。

「差異」あるいは多様なものを、ホールは自らの経験のなかから自身が置かれたポジションによって考察している (Hall 1982. 79-82, Hall 1985. 108-113)。それは「黒人」というタームをめぐって、それが示すアイデンティティ、場所、エスニシティ、そこから導かれる社会編制のイデオロギーが内包する複合的な言説の状態である。ホールは大学入学以来のイギリス生活のなかで、時には街角で、時には友人のマナーのなかで、「有色人種 colored」、「ウエスト・インディアン」、「ニグロ」、「黒人」、「移民」と呼びかけられ「表象」されていたのであった。このように呼びかけられることによって、意味連鎖のなかに彼は位置づけられていった。彼はそれを定義する人によってはそれらの定義のどれでもあり、どれでもなかったのである。これはカリブ海世界の歴史的な状況を考えてみれば、アイデンティティが単一のカテゴリーで括れるほど単純な問題ではないということに気づくであろう¹⁵⁾。従って、ホールはカリビアン歴史的な考察の中で、自らの文化的なアイデンティティを「アフリカの、ヨーロッパ的、アメリカ的」な「現れ presences」¹⁶⁾として定義するのである (Hall 1990/1994. 398)。

ここからもわかるように、アイデンティティとそのようなタームとの間には、多様なもの、あるいは「差異」は常に孕まれているのである。つまり、記号は「表象」のなかで常に多義性や「差異」を含んでいる。そして、このような「差異」は意味が一義的に同定されていく差別の構造からの脱却の方向をしめしているといえるだろう。

この「差異」の運動は、構造主義やアルチュセ

ールの「主体」構成のみならず彼の理論を貫徹する機能主義的であらかじめ「保証された guaranteed」囲いを措定して、記号や言説がその内部で変換されるというようなスタティックな分析では認識されない¹⁷⁾。もちろん、「意味」が戯れることによって失効してしまうというような、ポードリヤールのポストモダンの社会理論によっても解決されるものでもないのである。むしろ、構造という囲いそのものが決定不能に追いやられるような、ミハイル・バフチンのいう脱中心的な「記号の多強調性」¹⁸⁾や、フーコーがいうような二項対立が無効となるような境界的 border な領域である「ヘテロトピア heterotopia」¹⁹⁾ (Foucault 1984=1994) のダイナミックな思考が想定されているのである。

従って、ここでは二項対立をあたかも本質的なものであるかのように維持し補強しようと働く文化支配の政治力学に対して、それを脱構築してゆく「文化のノン・エセンシャルイズム」(Williams and Said 1989) という立場が求められている。これは、レイモンド・ウィリアムズがサイドとの対談のなかで述べられていることである。このような観点から、社会や文化を歴史的な「必然性」の過程と見るのではなく、そこに「偶発性」を取り入れることによって、差異が生まれてくるのである。

おわりに

このように「差異」の運動は、歴史的局面において様々な意味に接合されながら多様なものに関わられたアイデンティティを構築する。それは、特殊な歴史的局面における場 place によって生成する。このような場が編制されることによってスペース space や位置 position も立ち上がってくるだろう。それは、その人の置かれた状況によって生成する意味作用の問題なのである。そして、ここ

での位置は、アルチュセールによって考察されたような「国家のイデオロギー装置」によって呼びかけられることによって社会の再生産過程に組み込まれる「主体」ではなくて、「社会的なものの不完全で開かれた性格」を前提とした、そこからのズレを見出ししていくものとして想定されているのである。

これまで問題にしてきたことは、アイデンティティを構成する歴史的、文化的経験の多様性や差異、そして、アイデンティティの位置の問題であり、これが「表象」の政治学にとって欠かすことが出来ないものであるということを見定めることであった。ここでは、社会を「全体化」する力に攻める脱構築の試みが必要とされている。なぜなら、カルチュラル・スタディーズによって明らかにされたように、社会編制は決して一枚岩で、予定調和な構造ではないということである。そして、つまりは、そこから如何にしてハイブリッドな多様なものへの政治を見出していくのかということが必要であるという歴史や思想の問題なのである。

[注]

- 1) 「内破」という概念は、マクルーハンから取られたものである。ボードリヤールとマクルーハンをめぐっては (Genosko 1999) を参照。ここでも述べられていることであるが、ボードリヤールはマクルーハンの後継者として位置づけられている割には、これまでその影響関係は正面から論じられてこなかった。
- 2) 但し、今村・塚原訳の「記号表現」を「シニフィアン」に、「記号内容」を「シニフィエ」にそれぞれ変更した。
- 3) ボードリヤールは、後のニヒリズムに陥ってしまったポストモダニストとは異なり、「シミュラクル」に変革の可能性を認めているが、「死」による返礼というような詩的で危ない橋を渡っている。
- 4) ポピュラー音楽の社会学の第一人者、サイモン・フリリスもこのあたりの音楽を取り上げてポストモダン・ポップと称している (Frith 1988)。またフ

- リスを批判した (栗谷 1998 b) も参照。
- 5) シニフィアンが接合することによる「結節点」の問題については (Laclau 1996)。(栗谷 1997) も参照。
 - 6) ジャック・デリダは、ソシュールの言語学、記号論の知見を取り入れてフッサールの現象学における記号の問題を考察したのだが、このように現象学に言語学、記号論の知見を導入することは、「表象」の問題を言語や記号、意味作用の観点から捉え直すことを可能にしたということがいえるだろう。
 - 7) バトラー、コプチェク、ジジエクなどを参照するまでもなく、ここで取り上げるアルチュセールやラカンの問題圏は、現在の思想状況においても常にアクチュアルなものとして言及されている。
 - 8) 『文化、メディア、言語』(Hall et al eds 1980) では、スクリーン理論 Screen theory という言葉が使われている。
 - 9) (Heath 1980) には、『スクリーン』誌上に発表された論文が収録されている。また、(MacCabe (ed.) 1981) には、ポスト・アルチュセール派のバリー・ヒンデスやポール・ハーストと共にアルチュセール批判を行ったアントニー・カトラーの論文も収録されている。
 - 10) ホールも、このアルチュセールの「呼びかけ」については、ラカン理論の引用の中でも出所が曖昧な概念であると指摘している。(Hall 1980. 158)
 - 11) この「縫い付け」という概念は、ラカンの後継者、ジャック・アラン・ミレールが概念化した。
 - 12) なおヒースによるラカンを通したアルチュセールの読解はペシューが常に参照されている (Heath ibid: 101-107)。
 - 13) ホールもアルチュセールの「機能主義」的性質を批判している。(Hall 1980. 161)
 - 14) 筆者が調査しているカナダにおいても、マルチカルチュラリズムという政策によって表面上は民族文化の多様性が称揚されてはいるのだが、実態はマイノリティを「包摂」しながら「排除」という二重の差別構造になっている。
 - 15) マルティニーク出身の思想家、エドゥアル・グリッサンは、カリビアンアイデンティティをジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリを引用しながら多様な方向に広がる「リゾーム」であるという。(Glissant 1996=1997)
 - 16) ここでホールが自らのアイデンティティを複数形で記述していることは重要である。
 - 17) アルチュセールの社会理論の問題点については、

(粟谷 1997) で考察した。

- 18) 「記号の多強調性」は、英訳では “This Social Multi-acculturality of the ideological sign” となっている。(Morris (ed.) 1994, 55)
- 19) フーコーの「ヘテロトピア」については、それを

地理学の分野に導入し「スペース」の再考を図るエドワード・ソージャ (Soja 1996=1999) は文化的アイデンティティの理論には有益な視座を提供している。

[参考文献]

- Althusser, Louis. 1965/1996. *Pour Marx. La Découverte*. (=1994. 河野健二・田村 俣・西川長夫訳, 『マルクスのために』平凡社)
- 1970/1996. “Idéologie et appareils idéologiques d’État” *Sur la reproduction*. Presses Universitaires de France. (=1993. 柳内 隆訳, 「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』三交社)
- 粟谷佳司, 1997. 「カルチュラル・スタディーズと意味作用の政治学」『同志社社会学研究』創刊号
- 1998 a. 「レイモンド・ウィリアムズと文化研究の理論的遺産について」『同志社社会学研究』第2号
- 1998 b. 「ロックの時代精神からオーディエンスへ—文化研究とポピュラー音楽」『ポピュラー音楽研究』第2号
- Awatani, Yoshiji 2000 “Globalization, Cultural Identity and Japanese Culture” paper presented for the seminar at University of Toronto–York University Joint Center for Asia Pacific Studies.
- Baudrillard, Jean. 1975. *L’échange symbolique et la mort*. (=1982. 今村仁司, 塚原 史訳, 『象徴交換と死』築摩書房)
- 1981. *Simulacres et simulation*. (=1984. 竹原あや子訳, 『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局)
- Davies, Ioan. 1995. *Cultural Studies and Beyond: Fragments of Empire*. Routledge.
- Dor, Joël. 1985. *Introduction à la lecture de Lacan*. Denoël. (=1989. 小出浩之訳, 『ラカン読解入門』岩波書店)
- Fiske, John. 1991. “Postmodernism and Television” James Curran et al (eds). *Mass Communication and Society*. Edward Arnold. (=1995. 見島和人, 相田敏彦監訳, 「ポストモダニズムとテレビ」『マスメディアと社会』, 勁草書房)
- Fearherstone, Mike. 1990. *Consumer Culture and Postmodernism*. Sage
- 1995. *Undoing Culture*. Sage.
- Foucault, Michel. 1984=1994. “Des espaces autres” *Dits et écrits. Tome 4*. Gallimard.
- Frith, Simon. 1988. *Music for Pleasure*. Polity Press.
- Gane, Mike. 1991. *Baudrillard: Critical and Fatal Theory*. Routledge.
- Genosko, Gary. 1999. *McLuhan and Baudrillard: The Master of Implosion*. Routledge
- Giddens, Anthony. *The Consequences of Modernity*. Stanford University Press. (=1993. 松尾精文ほか訳, 『近代とはいかなる時代か』而立書房)
- Glissant, Edouard. 1996. *Introduction à une poétique du divers*. (=1997. 立花英裕訳, 「文化とアイデンティティ」『現代思想』Vol. 25-1)
- Goodwin, Andrew. 1992. *Dancing in the Distracting Factory: Music Television and Popular Culture*. University of Minnesota Press.
- 1993. “Fatal Distractions: MTV meets Postmodern Theory” Simon Frith et al eds. *Sound and Vision: The Music Video Reader*. Routledge.
- Hall, Stuart et al. 1979. *Policing the Crisis*. Macmillan.
- Hall, Stuart et al eds. 1980. *Culture, Media, Language: Working Paper in Cultural Studies, 1972–79*. Routledge.
- Hall, Stuart et al eds. 1992. *Modernity and Its Futures*. The Open University Press.
- Hall, Stuart. 1980. “Recent developments in theories of language and ideology: a critical note” Hall. et al eds. 1980
- 1982. “The rediscovery of ‘ideology’: return of the repressed in media studies” Michael Gurvitch. et al eds. *Culture, Society and Media*. Methuen.
- 1985. “Signification, Representation, Ideology: Althusser and Post-Structuralist Debate” *Critical Studies in Mass Communication*. Vol 2. no. 2

- 1986/1996. “Gramsci’s relevance for the study of race and ethnicity” David Morley and Kuan-Hsing Chen eds. 1996. *Stuart Hall : Critical dialogues in Cultural Studies*. Routledge.
- 1988/1996. “New ethnicities” D. Molrey and K. Chen eds.
- 1990/1994. “Cultural Identity and Diaspora” Patrick Williams and Laura Chrisman eds. *Colonial Discourse and Post-Colonial Theory : A Reader*. Columbia University Press.
- 1992 a/1996. “Race, culture, and communication : looking backward and forward at cultural studies” J. Storey ed. *What is Cultural Studies? A Reader*. Arnord.
- 1992 b/1996. “What is this “black” in black popular culture?” D. Molrey and K. Chen eds. 1996.
- 1992 c. “The Question of Cultural Identity” Stuart Hall et al eds. *Modernity and Its Futures*. The Open University Press.
- 1996. “The Formation of a Diasporic Intellectual : an interview with Stuart Hall by Kuan-Hsing Chen” D. Molrey and K. Chen eds. (=1996. 小笠原博毅訳, 「あるディアスポラ知識人の形成」『思想』859/1996)
- 1996. “Introduction : Who Needs ‘Identity’?” Stuart Hall and Paul du Gay eds. *Questions of Cultural Identity*. Sage.
- 1997. “The Work of Representation” Stuart Hall ed. *Representation*. Sage.
- Harvey, David. 1988. *The Condition of Postmodernity*. Blackwell.
- Jameson, Fredric. 1991. *Postmodernism or, The Cultural Logic of late capitalism*. Duke University Press.
- 1998. *Cultural Turn*. Verso.
- Heath, Stephen. 1980. *The Questions of Cinema*. Macmillan
- 今村仁司, 1981. 「ラカンとアルチュセール」『現代思想』Vol.9-8
- Kellner, David 1990. “Postmodernism as Social Theory” *Theory, and Culture and Society*. 5
- 1995. *Media Culture : Cultural Studies, Identity and Politic between the Modern and the Postmodern*. Routledge.
- Lacan, Jacques. 1966. *Écrits*. Seul. (=1972. 宮本忠雄訳, 「心的因果性について」1977. 佐々木孝次訳「精神病のあらゆる可能な治療に対する前提的問題について」1972, 1977, 1981. 宮本忠雄ほか訳, 『エクリ I II III』弘文堂)
- 1975. *Le Seminaire Livre I*. Seul. (=1991. 小出浩之ほか訳, 『フロイトの技法論【上】』岩波書店)
- Laclau, Ernesto. 1996. *Emancipation (s)*. Verso.
- Lion, David. 1994. *Postmodernity*. (=1996. 合庭 惇訳, 『ポストモダニティ』せりか書房)
- Lytard, Jean-François. 1979. *La condition postmoderne*. Minuit. (=1986. 小林康夫訳, 『ポストモダンの条件』水声社)
- MacCabe, Colin. ed. 1981. *The Talking Cure : Essays in Psychoanalysis and Language*. Macmillan.
- Moore, Shaun. 1994. *Interpreting Audiences*. Sage.
- Morley, David and Kuan-Hsing Chen 1996. “Introduction” D. Molrey and K. Chen eds. 1996. *Stuart Hall : Critical dialogues in Cultural Studies*. Routledge.
- Morley, David and Kevin Robins. 1995. *Spaces of Identity*. Routledge.
- Morley, David. 1980. “Texts, readers, subjects” Stuart Hall. et al eds. 1980
- 1996. “Postmodernism : The Rough Guide” James Curran et al eds. *Cultural Studies and Communications*. Arnord.
- Morris, Pam. ed. 1994. *The Bakhtin Reader : Selected Writings of Bakhtin, Medvedev, Voloshinov*. Arnord.
- Poster, Mark. 1990. *The Mode of Information*. Polity Press. (=1991. 室井 尚, 吉岡 洋訳, 『情報様式論』岩波書店)
- 酒井隆史, 2001. 『自由論』青土社
- Said, Edward W. 1978. *Orientalism*. (=1993. 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳, 『オリエンタリズム』平凡社)
- Soja, Edward. W. 1996. “Heterotologies : Foucault and the geohistory of otherness” *Thirdspace*. Blackwell. (=1999. 加藤政洋訳, 「ヘテロトポロジー」『現代思想』12月号)
- Spivak, Gayatri Chakravorty. 1988. “Can the Subaltern Speak?” C. Nelson and L. Grossberg eds. *Marxism and the Interpretation of Culture*. University of Illinois Press. (=1998. 上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』みすず書房)
- Tomlinson, John. 1999. *Globalization and Culture*. Polity Press. (=1999. 片岡 信訳, 『グローバリゼーション』青土社)
- West, Cornel. 1995. “The new cultural politics of difference” John Rajchman ed. *The Identity in Question*. Routledge.
- Williams, Raymond and Edward Said. 1989. “Media, Margins and Modernity” Raymond Williams. *The Politics of Modernism*. Verso.